

◆ 上尾市域の特産物 ◆

古文書にみる宿場と村の生活 ⑨

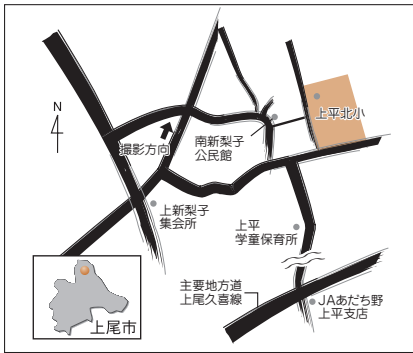
江戸時代も後半期になると各地に特産物が生まれるが、農村地帯である上尾市域の特産物は、農産物とそれらの加工品である。江戸時代後期の埼玉県域は、西側は養蚕地帯で東側は木綿地帯であり、「絹」と「木綿」が二大特産物である。上尾市域は木綿地帯にあり、畑地に綿が作られ、農民の手により「綿織物」が生産されている。享保六（一七二一）年の上瓦葺村の記録に、「木綿」の栽培が見えるのはその例である（『新編埼玉県史通史編4・上尾市史第三巻』）。

江戸後期の上尾市域の特産物に、名の知られたものに「紅花」がある。紅花は商人がもたらした作物で、江戸の柳屋五郎三郎の手代が、上村（上尾市大字上）の七五郎に種を渡して栽培させたといわれる。紅花は栽培期が麦作と競合するが、高収入になったため栽培が拡大している。紅花は開花した花を摘んで半加工の「紅餅」にするが、これが京都などの問屋に送られることになる。当時生産地の各村々では、農間渡世の紅花商人が数多く活躍している（『武州の紅花』）。



現在も「かご屋」と称される家が点在している南新梨子地区

紅花のように多くの村々で生産された特産物もあるが、南村の「筴」のように一村かぎりの特産物もある。正徳六（一七一六）年の南村明細帳では、「男ハさる（筴）を作りかせ（稼）き仕候」と記されている。これだけの記述では分かりにくいですが、この時代に竹製品が生産されていたことが注目される。この地区は現在でも通称「かご屋」と称される家が所在し、江戸時代の特産物が現在まで続いているという。県内でも珍しい特産物事例となっている（『上尾市史第三巻』）。



上尾市域には江戸初期に「酒造株」を所有し、酒造を営む者もいるが、幕末期には酒造を営む者が上尾宿・原市村などで増大している。その点からみると、「清酒」も上尾市域の特産物ということになる。ところで同じ醸造業でも「醤油」は、関西に比して関東は遅い発達である。幕末期に久保村須田家では醤油を醸造しているが、発達の遅かった関東では珍しい事例である。同家は近在農村の需要を背景にしており、これは当時の農村の生活水準の向上をうかがわせることになる。また醤油の需要が増大したのは、当時の食生活が変化してきたことを示している。いずれにしても醤油も清酒と並んで、上尾市域の特産物ということになる。上尾市域の特産物が増大してきたことは、地域の人々の生活が上昇してきたことを示している（前掲書）。

（元埼玉県立博物館長・黒須茂）



○に入る文字や数字を当ててください。

○○○○○○のルートとダイヤを変更します。

（ヒントは5ページ）

【賞品】 正解者の中から抽選で5人に、粗品を差し上げます。

【応募方法】 はがきかメールにクイズの答え、住所、氏名、年齢、電話番号、『広報あげお』の感想を記入して、12月21日（金）まで（必着）に上尾市広報課「わくわくクイズ係」へ。

あて先：〒362-8501本町3-1-1
メールアドレス：s55000@city.ageo.lg.jp

【発表】 賞品の発送をもって発表に代えさせていただきます。 ※正解は1月号のこのコーナーで。前号の答えは「あげお」でした。ご応募ありがとうございます（応募者45人）。

市の人口・世帯

（平成24年11月1日現在）

22万7,515人

男／11万3,487人

女／11万4,028人

※前月より84人増。

9万4,009世帯

◆『広報あげお』は、各支所・出張所、JR上尾駅・北上尾駅の他、市内の各公共施設、金融機関などに置いてあり、自由に持ち帰れます。
◆環境保全のため、市内の公共施設へのお出掛けは市内循環バス“ぐるっとくん”を利用してください。